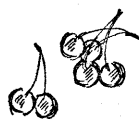


保育の体験と思索

—子どもの世界の探求—(九)

津 守 真



入園を前に心躍らせて待つ心

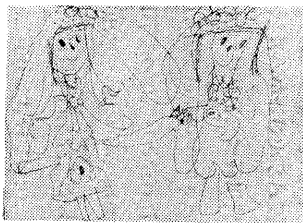
いまとは違った、いま見えていない生活を前にして、心躍らせてそれを待つ時がある。幼い子どもの場合、その期待は純粹であって、少しも疑いを知らず、ひたすらに胸躍らせて待つ。外出の前、旅行の前、祭の日、誕生日やクリスマスのパーティの時、贈り物をもろう前など、その純粋な気持ちのふくらみを、もはや容易には得られない残念さと共に記憶している人は多いと思う。Yが四歳の二年保育の年少組に入園する前の一、二か月はまさにそのような心の状態であった。

「幼稚園にはお友だちがいるでしょう、あたしだけのお友だちがいるでしょう」こう言って、Yは幼稚園にゆけば、自分だけの友だちがいると思って楽しみにしていた。兄や姉の友だちはたく

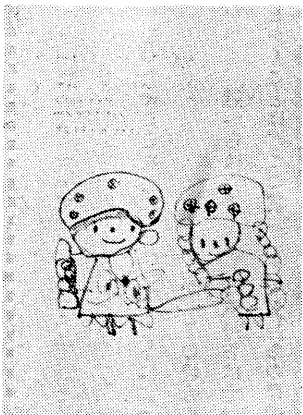
さん来るし、その中にまじって遊ぶが、いざとなればさっと立ち去って自分だけ取残される経験をしばしばしている。幼稚園にゆけば自分だけの友だちがいるだろうというのは、幼稚園のことが話されるときにYが述べたことであった。

写真1(2月11日、4歳3か月)は、着飾った女の子が二人手をつないでいるところである。Yはこのごろ、手をつないだ女の子の絵を数多く描く。

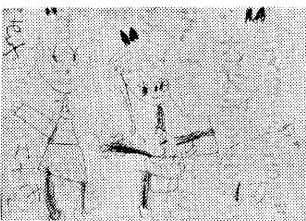
写真2(2月17日、4歳3か月)も、手をつないだ女の子である。これを描きながら、「おさげのぼうしよ、これ、あたしのみただけと模様が違うの。あたしのに模様なんかないでしょ。やぶけてもかくよ。お友だちと手つないでんの」という。この日は朝から姉の友だちがきて、Yも一緒に紙のおひなさまを作ったりした。それから私は、よく附属幼稚園で見ていたような水族館



▲写真 1



▲写真 2



▲写真 3

を、空箱や紙で作って半日を過ごした。友だちが帰ったあと、みんな紙を出してきて絵をかきはじめた。Yは姉が持っているうす紙がほしくなって、「うすい紙でなんかうつつすから、この紙ちょうだい」と言って姉たちの間をまわって歩いていった。ようやく一枚もらったが、もっとたくさんほしいと言って泣いた。「お母ちゃまが紙買ってきたら、ゼーんぶちょうだい」と言って泣く。私もその場において、ごたごた片づけたりなどしていたが、「ほんとに、ぜんぶほしくなるねー」と言うと、Yはすぐ泣きやんで、「でも、みんなにわけてあげるんだね」という。そのあと、そばにあった紙にかいたのがこの絵である。子どもが一枚の絵をかこうと思うに至るのには、それだけの経過があることがわかる。そ

して、こうして自分から描こうと思った絵には、そのときに子どもの中にあったものが出てくるのだと思う。おさげのついた白い帽子は、Yの大好きな気に入った帽子である。それをかぶった女の子は、Y自身でもある。そして友だちと手をつなぐということは、Yの心のがれであり、それが絵にあらわれる。途中で紙が破けるが、それでもかきつづける。

写真3（3月1日、4歳3か月）は、同じく手をつないだ女の子であるが、人数が三人になっている。

写真4（3月4日、4歳4か月）は、六人の女の子が手をつないでいる絵である。これをかきながら言う。「幼稚園には、いろんな人がくるでしょ。でもね、男はいれなかったの。いじわる

な男はいれないけど、Aちゃんはやさしいから。幼稚園の人のおとなはきていないのよ。女って、だーいすき。だって、女ってかわいいもん」Yが幼稚園にゆく一か月前のことであるが、幼稚園にいくと、こんなにたくさんの女の子が手をつなぐことを心に思い描いていると言ってよいであろう。

同じころに、Yは三枚つづきの電車の絵をかく。窓からは女の子がたくさんのぞいている。Yが電車の絵をかくことは、この前も後も、ほとんどない。このころには、それ程にYの心は動いており、はずんでいたのだろうと思う。

写真5（3月28日、4歳4か月）は、細長い紙に横向きの女の子が四人並んでいるところである。これをかきながら言う。「これ横向き。お友だちと遊んでんの。また三つ編みしてる人がいいわ。これがあたしでしょ、これがPちゃん、これがAちゃんのお友だちで、これがAちゃん。」

こうして、一枚の紙に何人も人の絵を描くのは、決して偶然ではなく、子どもの心の中には、何人も子どもと一緒に遊んでいたりと楽しくしたりしていることではすでに明らかである。また、手をつないだ絵を描くのは、自分がだれかと手をつないでいるところを心に描いているのであることも明らかである。子どもが自分から描きたくなくなって描いた描画には、子どもの

心の中に動いて感じられているものがあらわれるのである。

Yの描画と限らず、子どもの描画には、その子どもの心があらわれるので面白い。

子どもによって、入園前の子どもの状態はいろいろである。Yの場合には、友だちを得て、友だちと交わってゆこうとする気持ちは十分に成熟しており、大勢の子どものいる幼稚園にゆく気持ちの準備は十分にできていたと言えるだろう。

写真6（4月8日、4歳5か月）は、入園の直前に描かれたものであり、「さくらんぼをとってる子」と名付けられたはなやかな絵である。大きく成長した自分自身が描かれ、手を伸ばしてさくらんぼの実をとっている。くだものやの店がある。また女の子は、家の外に出ている。友だちと手をつなぐことを楽しみにして待ち、いまやその機会がくるばかりになっている精神のふくらみを見ることができるところである。

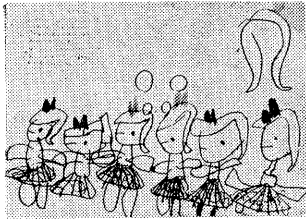
Yの入園

4月10日

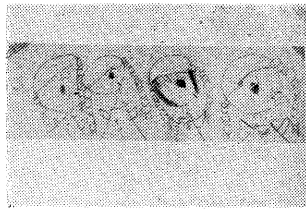
幼稚園の入園式の前の晩、ねるとき、ベッドにねかせにいった私の顔を見て、Yはにこにこして言っていた。「うれしいなー、

うれしいな、あしたはMちゃんと幼稚園にいくんだ。お友だちが、五十人も百人もできた」Mちゃんは、近所の女の子で、四歳の年少組にはじめて入園する子どもである。

入園式の当日、幼稚園の玄関で上げきにはきかえて、靴を靴箱にいれる。靴箱に名前がついているが、小さなはんどで押した名前をさがすのに苦勞する。一度それぞれの組の部屋に入って座り、入園式の注意をうけてから遊戯室に集まる。先生が大声で、上げきにはきかえて遊戯室にいきましょうと注意するが、どの下ばきにはきかえるのか、親にもわからない。幼稚園には、部屋のための靴と、庭に出るための下ばきと、通園の靴と三種類ある。それで玄関の靴箱のところ、親と子どもがいりまじって大



▲写真4



▲写真5



▲写真6

混雑になり、親の制止する声が響いて、大きわぎになる。先生たちは入園式の支度に忙しくして、玄関の混雑には気が付かないみたいである。ようやく並んで遊戯室に入り、入園式になる。この日は、友だちと手をつなぐどころではなく、遊ぶ時間もなくて、親も子もへとへとになって帰ってきた。Yは家に帰る途中も、帰ってきてからも、口もきかない。

4月11日

この日は、玄関が混雑する前に行きたいと思い、早めに幼稚園にいった。私は玄関で少し大きな声でYのことを一つずつ言っている。「靴をぬいで、——靴箱にいれて、——運動靴を出し

て、——ぐるっとまわって、——帽子をおいて、——スモックをきて」と、一段階終るごとに言つてやると、その通りやつて着がえを終る。保育室の入口まで手を引いていってやると、一步部屋の中にはいるが、じっと立って見ている。

一時間半ほどして帰る時間になる。玄関に出てきたとき、「もう夕方？」と私にきく。もう一日中たつて、夕方になつたかのようには思えたのであろう。この日は部屋の入口で立ったまま、じっとしていたとのことである。

この後、ずっと、幼稚園にゆくと同じような状態で、じっと立って見ているだけの日が続く。ときどきだれかと手をつないで歩くことがあるが、大体は何もしないで見ていることが多かった。かなり後になってY自身の言ったことよつて分かつたのであるが、幼稚園では遊ばないと自分できめていたようである。家に帰つてからは、間もなく、以前と同じように、兄や姉や、その友だちとよく遊ぶようになる。

写真7（4月15日、4歳5か月）は、入園後ほとんど最初に書いた絵である。戸棚があり、その左わきの囲いの中に女の子が入っている。紙の上方に線がひかれて、全体が家の内部のようになっている。囲みの中の女の子は、Y自身を示すものであろう。Yはいまや、自分自身、幾重にも囲みの内部に入りこんだかのよう

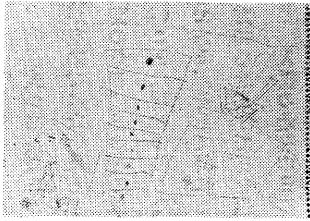
に感じていたのであろう。この後家で描くYの描画には、これと同種のものがつづき、友だちと手をつなぐ絵は、秋になるまであらわれない。Yがこの後再び、積極的に外に関心を向けるようになるのは、一年以上たつてからである。

Yの入園前後の様子を、家庭の側から観察したところを記した。幼稚園の側から見れば、入園式は幼稚園のはじまりであり、この子どもは、最初の日から何もしないで立っている子どもであつたらう。しかし、子どもにとっては、入園式が幼稚園のはじまりではなくて、幼稚園にはいる日を待ちはじめたそのときから幼稚園のはじまっていた。先生から見たのはじまりは、子どもにとってははじまりではないのである。子どもたちはそれぞれいろいろの思いを持って幼稚園にくる日を待っている。

ここに述べたYの場合は、その一例であるが、他にも似たような例はかなりあるのではないかと思う。

幼稚園にいったら、自分の友だちと遊べるだろうとわくわくして待ち望み高揚した幼児の心は、たとえ実際には破られることがあつても、張りを持って待ち望んでいたその時が貴重なのである。子どもの生活は、未来に対する希望を持った張りが基調となつて、それが子どもの明るさとなつているのかもしれない。青年

期でも似たようなことがある。おとなの社会は、それを経験した者にとっては、夢からは縁遠い汚濁したものであっても、青年はおとなの生活の入口で夢を失わない。夢が破れてゆくのが避けられない現実であっても、未来には夢がないことを早くから教える必要はないであろう。おとな自身にしても、現実が困難と落胆が多くとも、心の片隅には、決して夢を捨て切つてはいないのではないか。幼い時に純粹に希望に胸をふくらませて待つ体験がなかったならば、困難な現実になぶつかったとき、その中からも夢を生み出してゆく力は湧かないのではないだろうか。友だちと手をつなぐ絵をかきつづけて幼稚園を待っていたその高揚した生活のその時が、この子どもにとって価値があったのだと思う。



▲写真 7

幼稚園が子どもの期待や夢を叶えることができなかつたからと言って、幼稚園の良し悪しを断ずることはできないであろう。知らずして子どもの期待を裏切ることとは、どこでも起こることである。しかし、だからと言って、子どもを受けとる側に立つた場合、子どもを受けいれる仕方はどうであってもよいというのではない。幼児が生活しやすいような受けいれ方の工夫が必要であると思う。私は自分が子どもを受けとる立場に立たされるときに、いつもこのYの例を思い起こして、あれこれと考える。

入園式というのは、幼児にとってどれだけ意味のあるものなのだろうか。幼児が幼稚園に来た最初の日に、そのまま自然に遊べてしまったら、どんなに幼稚園の生活にはいりやすいことであらう

うか。入園式が必要ならば、子どもたちが幼稚園になれてから後の方が有効ではないだろうか。

入園の最初の日の物の配置、空間の使い方、物の整備など、こまかいことは記せば限りないし、どこでも多くの工夫をしていることである。そして何にもまして、おとな自身が、早くから子どもの方に心を向けて日を過ごしていることが重要であると思う。

そして、入園の最初の日には、他のことに気をとられることなく、子どもとふれることに専念できるようにしたいと思う。

子どもが毎日くるようになったら、それぞれの子どもがどんな思いを持って来ているのかははかり知れないことであって、日々子どもと共に歩むよりほかないであろう。入園したての時期に、これだけのことはしなければと、こまかい活動事項に気を奪われていたのでは、子どもと共に歩むことはできなくなる。それぞれの子どもが安心して動ければよいし、楽しんで何か少しでもできればなおよい。おとなの側からいうならば、子どもにふれることができたという実感が持てればよい。これらのことをぬきにして、何事もできないと思う。子どもの夢を叶えるというのは、あたりまえに自然な心で子どもにふれて、共に生活する以外にないのではなからうか。その中で、子どもが楽しみに期待していたものや、あるいは不安が何であったのかがわかるし、それに応じ

て、こちらでどう動けばいいのかも分かってくる。やらせなければならぬことで頭がいっぱいになっていると、子どもの心がこちらに伝わらなくなる。

四歳児

これまで、三歳児の保育を主にして述べてきた。三歳児とのふれ合いの中で考えてきたことは、まだ書き足りないが、筆の方が遅く、附属幼稚園でつき合ってきた子どもたちが四歳児になったので、これから四歳児の方に移ろうと思う。家庭児のYは、三歳児の時は幼稚園にゆかなかった。附属幼稚園の三年保育の子どもたちは、四歳になると、新たに二年保育で入園する子ども二十名を加えて、一クラス約三十五名になる。愛育の知恵遅れの幼児についても、できるだけ四歳児を主にして記したいと思う。

四月十八日

久しぶりで、また四月になってはじめて、附属幼稚園に入った。室内に入ると、七、八人の子どもが静かに遊んでいる。三歳からの男の子が数人ブロックをつなげており、また新しい男児が

三人、そのそばで積み木をしている。

私が床に腰をおろすと、三歳からの男児Sがブロックをつなげたのを私のところに持ってきて、「これ、なんだ」と言う。私が何だろうというのと、「ほら」とブロックを一部分ひきぬいて見せてくれる。そうすると、ロボットの形になる。一年前に私がおはじめてこのクラスに来たときに、最初に私の傍で積み木を始めて、シンメトリーに積んで遊んだのは、この同じSであった。その後一年間を通して、Sは私とそれほど親しくつき合った子どもではない。ところが一年後の新学期のはじめに、室内にいて、最初に近よってきたのがSであることに驚く。Sが作っていたロボットは、Sにとっては何なのだろうか。

男児T、Y、Kが、ブロックを持って、「バーン」と私にぶつかってくる。いずれも三歳からの子どもで、久しぶりで私に会ったあいさつのようなものである。私は床にひっくりかえりながら、この子どもたちが、久しぶりの邂逅なのに、こうして私にぶつかってきてくれることをうれしく思う。

三歳からの男児たちは、新しい子たちとすぐ近くで遊んでいるのに、ほとんど交渉がないようである。以前からの子どもたち同士のかたまりのようなものが目立つ。新しい子どもたちはまだばらばらだし、だれにでも同じように話しかけたり、傍に寄って

ったりするようであるが、以前からの子どもたちは、知っている人同士で話し、一緒に遊び、新しい子どもにはふれることのためにいろいろあるようである。このことは、後にまた、とり上げることになるであろう。

庭に出た時、砂場で水を流していたMくんが、私にシャツの腕をまくってもらいにくる。Mくんのことには以前に記したことがあるように、私に体でぶつかってきた子どもである。久しぶりで会ったMくんが、私にやわらかく、素直にふれてきたことに驚く。

Mくんは、幼稚園でよく遊んでいるように見えるけれども、新学期になってから、家に帰ると、「きょうは、ちっとも先生とあそべなかった」と言うとのことである。先生は新しく入った子どもに手をとられているので、以前からの子どもは、先生と遊べなかったという物足りなさを感じているのだろう。新学期には、二年目の子どもにも、それなりの苦労がある。(つづく)

